

**発行所**  
 札幌市北区北15条西7丁目  
 北大医学部同窓会  
 TEL&FAX (011) 706-5007  
 E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp  
 http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/  
**編集人** 田中 伸哉  
**発行人** 浅香 正博

# 北大医学部同窓会新聞



「北大植物園 ハルニレの林」

高橋 敦(42期)

CONTENTS	
(1)・副会長再任のご挨拶……橋本 紘治 ・副会長就任のごあいさつ…寺沢 浩一	
(2)・教授就任のご挨拶 久住 一郎 岩崎 倫政 豊嶋 崇徳	
(3)・百寿の「都ぞ弥生」……宮田 睦彦 ・春の叙勲……若林 征子 ・ズームアップ① ドイツ等功勞十字章を受章して ……岡田 晃	
(4)・名誉教授 高橋香織先生(22期)を偲んで ……武藏 学 ・名誉教授 宮崎 保先生(32期)を偲んで ……浅香 正博 ・新世紀の医学に向けて(20) オール北海道で取り組む橋渡し研究 支援拠点形成事業 — この5年間の総括と今後の展望 — ……安田 和則	
(5)・「各地区フラテ会だより」 — 神奈川支部の活動 — ……仁保 正和 市川 靖史	
(6)・フラテ祭2012開催報告 ・平成24年度フラテ研究奨励賞公募!! ・フラテ99号発行のお知らせ	
(7)・告知板 ・新刊書紹介	
(8)・新刊書紹介 ・ご逝去者 ・一面の写真説明 ・編集後記 ・お詫びと訂正	



## 副会長再任のご挨拶

橋本 紘治(47期)

本年4月、会長に選出された浅香正博先生から副会長留任のご指名を受けました。前会長西信三先生の補佐役として2年間務めました。浅香先生から、もう少し留まり手伝うようにとご依頼を受け甚だ光栄に思っています。

私が同窓会の仕事に携わってから、もう36年になります。編集委員に任命されたのが始まりですが、同窓会役員の最古参となりました。浅香先生や寺沢浩一先生もその後間もなく編集委員会に加わっていますので、今期の三役は編集委員会古顔の揃い踏みという陣営になったようです。

同窓会本来の目的である会員相互の親睦や医学部の振興発展に寄与する学内外情報の収集広報は、編集委員会の最も重要な業務です。同窓会の中では、編集委員会の活動が主軸となっています。この30余年の間に、新聞や同窓会誌の編集を通して、外では得られない知識や情報により私自身が育まれてきたように感じています。

編集委員会の変遷や数々の苦労話は2年前の「就任の挨拶」で述べましたが、近年では平成18年から5年計画で行われた医学部創立90周年記念事業が非常に印象深く、事業開始当時の本

間研一医学部長が構想したフラテ会館も立派に完成しました。新フラテ会館には昔の医学部本館のイメージを残したいという本間先生のお考えから、旧本館正面の破風屋根の下にあったレリーの再現を計画され、当時編集委員長で、同期生でもあった私に相談されました。古いアルバムの中で、たまたま我が期が解体直前の旧本館前で撮った記念写真にそのレリーフが写っており、早速その部分を拡大したものや、メダリオンを囲むアカンサスの葉脈の配置を新フラテ会館の形状に合わせて変更し、両脇には新たに延齢草を入れた素案を描いて、記念事業で熱心にレリーフを担当していた寺沢先生にお渡ししました。フラテ会館竣工後、やや遅れて昨年5月に待望のレリーフも完成しました。

医学部創立100周年を控えて、その記念事業が盛大に行われる為に相応しい環境が整ったと思います。

拡大発展を続ける北大医学部を力強く支える同窓会ですが、近年の社会的風潮や若い世代の思考的变化にも順応できるように、更に開かれた同窓会になるように、今後も微力を尽くして参りたいと考えております。



## 副会長就任のごあいさつ

寺沢 浩一(54期)

この度、副会長のご指名を受けました寺沢浩一と申します。このところ副会長が医学部の執行部のメンバーが就いておりましたので戸惑いましたが、浅香会長からご依頼がありましたので、お受けいたしました。

昭和53年に卒業いたしました、すぐに脳外科の都留美都雄(19期)先生のもとで編集委員を指名され、『写真集 北大医学部60年の歩み』の編纂にも携わらせていただきました。松宮英視(24期)先生、橋本秀夫(専3期)先生をはじめとする編集作業に情熱を持たれている先生たちの中で編集作業を覚えていきました。

編集委員長を平成8年から13年まで務めさせていただきました。その際に、『同窓会新聞縮刷版』の編集を手がけましたが、当時「同窓会会員の声の聞こえる新聞に」という考え方に至っておりました。微々たることしかできませんでしたが、今でも同窓会が発行する出版物は、会員の努力・協力により出来るものであって、編集者はそのためのお手伝いをする係と考えております。

医学部創立90周年の際の各種事業は会員の熱いお気持ちを実ったものと感じております。私は『90周年記念写

真集』の編集に当たらせていただきましたが、『60年の歩み』の編集委員のうちで北大に残っている者として指名されたものと思います。『歩み』の巻末に載せられている編集委員の集合写真を何度も見てヤル気を持続させていたことを思い出します。

フラテ会館の玄関上部のレリーのデザイン案を取りまとめることも医学部から与えられた仕事でした。同窓会OBの方々のお知恵をいただき、延齢草の花をあしらった、旧本館(大正12年8月30日竣工)のレリーフをリニューアルした形を得ることができました(『北大医学部90年史』85ページ)。

先日、フラテ祭2012(学部主催)がありました。毎年3月に総会に引き続いて開かれます同窓会主催の新入会員歓迎会は重要だと考えています。新卒の学生とOBたち、OBどうしの交流ができる最大の場であるからです。

編集という作業を中心に同窓会にかかわってききましたが、これからは浅香会長のもと、同窓会の活動に微力を尽くしたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

## 教授就任のご挨拶


**神経病態学講座  
精神医学分野**
**久住 一郎**  
(60期)

このたび、平成24年9月1日付けで、神経病態学講座精神医学分野の教授を拝命いたしました。創設以来85年の歴史ある教室を担当させていただくにあたり、これまで多くの諸先輩が築き上げてきた伝統と数々の業績を考えますと、重責に身の引き締まる思いです。精神医学教室の初代教授は内村鑑三氏のご子息である内村祐之先生であり、

その後も、大熊泰治先生、石橋俊實先生、諏訪 望先生、山下 格先生、小山 司先生とわが国を代表する歴代教授によって脈々と伝統が引き継がれ、今日に至る教室の発展が築かれました。現在、当教室は、全国的にも教育・研究・臨床のバランスが最もよく取れた精神医学教室の一つであることが他の多くの教室から指摘されています。

私は昭和59年に北海道大学を卒業後、山下名誉教授の下に入局し、臨床の基礎を学ばせていただきました。私の臨床スタイルの原型は、山下名誉教授の「背中」から得たものがほとんどであ

ると言っても過言ではありません。市立室蘭総合病院での研修、国立精神・神経センター（現：国立精神・神経医療研究センター）神経研究所への国内留学を経て、北大帰局後は、小山名誉教授に研究を指導いただきながら、いろいろな役割を通して、多くのことを学ばせていただきました。また、数多くの同門の諸先輩に暖かく見守られながら、ご指導いただいたことによって今日の自分があることを鑑み、これまで受けてきた恩恵をこれからの世代に確実に伝えていくことが私に与えられた最大の使命であると考えております。

従いまして、教室の運営を始めるにあたってのテーマは、第一に、基礎的な臨

床力をしっかりと身につけた上で科学的・論理的思考ができる臨床家、そして、様々な場面で社会に貢献できる人材を育てることであり、第二に、大学院大学の一臨床教室として、精神医学の発展に少しでも寄与できる国際的な研究を発信していくことでもあります。医学や医療の急激な変化に直面している現在、良き伝統を守りながらも、時代の変化を鋭敏に察知し、柔軟に対応していくことが求められています。その道は決して容易なものではありませんが、教室員と力をあわせてより高い目標をめざしていきたいと考えております。同窓会の皆様のご指導とご支援をよろしくお願い申し上げます。


**機能再生医学講座  
整形外科分野**
**岩崎 倫政**  
(会員2)

平成24年10月1日付で北海道大学大学院医学研究科機能再生医学講座整形外科分野の教授を拝命いたしました。開講以来約65年にわたる伝統ある教室の運営を任せられましたことを大変光栄に思うと同時に、その責任の重大さに身の引き締まる思いであります。

私は昭和63年に旭川医科大学を卒業し、同年四代目金田清志教授が主宰

される北海道大学医学部整形外科教室に入局しました。その後、関連病院にて研修を行い、平成6年に大学院に入学、手関節のバイオメカニクス研究に従事し、平成10年に学位を取得

しました。この間、研究の更なる発展のため米国Johns Hopkins大学の整形外科バイオメカニクス研究室に留学しました。留学中は、自身の研究を行うかたわら、研究の計画立案から論文作成までの過程を系統的に学ぶことができ、帰国後に基礎研究を継続するうえで大いに役立ちました。大学院修了後は、三浪明男先生（のち五代目教授）の指導

のもと上肢疾患に対する診療と研究を行い、基礎分野では軟骨再生医学や軟骨変性のメカニズム解明に関する研究を行ってきました。

整形外科では乳幼児から高齢者までの先天性疾患、外傷、腫瘍および慢性疾患といったきわめて幅広い疾患の治療を行います。また、扱う組織も骨、軟骨を含む硬組織から筋肉、腱・靭帯、神経および血管を含む軟部組織まであります。さらに治療に関しては、外科系診療科ではありますが内科的治療から外科的治療まで行います。したがって幅広い知識と技術を体系的に修得する必要があります。だからこそ、整形外科はきわめて魅力のある非常にやりがいの

ある診療領域であると言えます。私は、ぜひとも、若い世代の先生方と共に当教室で整形外科の診療および研究を行っていきたくと考えています。

北大整形外科は、国内でもトップクラスの歴史と伝統を誇る教室であります。しかし、決して伝統に閉じこもることなく、常に現状を改革する勇気を持ち、世界をリードするoriginalityの高い研究と客観的評価に耐える最高水準の診療を行い、研究マインドと指導力を兼ね備えた整形外科医を育成することで、更なる教室の発展を目指す所存であります。同窓会の諸先生方におかれましては、ご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。


**内科学講座  
血液内科学分野**
**豊嶋 崇徳**  
(会員2)

平成24年8月1日付けで血液内科学分野教授を拝命いたしました。ここに謹んで新任のご挨拶を申し上げます。北海道大学における血液診療は古くから各ナンバー内科によって担当されておりましたが、平成21年より「造血細胞治療センター」として血液診療の一本化が図られ、平成23年8月には講座組織も一本化されました。この、新生「血液

内科」のバトンを初代今村雅寛前教授より私が引き継がせて頂くこととなり、大変光栄であると同時に、責任の重さに身の引き締まる思いです。

私は、鳥取県の日本海沿岸の農村で育ち、昭和61年に九州大学医学部を卒業後、当時の第一内科に入局しました。そこで血液内科を専攻し、その後のキャリアの最初の3分の1を九州大学とその関連病院で、次の3分の1は岡山大学第二内科と米国留学で、そして最近の3分の1を再び九州大学で過ごしました。このように私は、異動することによって新たな仲間と巡り合い、新

たな視点を得ることで成長してきたと思っています。

このような私の経験を、これまで脈々と培われてきた北海道大学の血液学、血液診療の伝統と業績に融合することによって、この新生「血液内科」をますます充実させ、新たなステージへと昇華させていくのが私の使命であると肝に銘じています。

新生「血液内科」は歴史が新しいこともあり、若者が主体の情熱にあふれた教室です。明るく、開放的で、多様性を許容する懐の深い教室運営をめざし、多くの若者を集めたいと思います。そして医師である前提として、自らが魅力にあふれる人間であり、相対したときに熱

い思いがひしひし伝わってきて、患者さんや周囲のスタッフから心から尊敬されるような医師を育てたいと思います。同時に、疾患を科学的に徹底して分析する姿勢を持ち、問題を発見し、研究によってこれを解決しようという志と能力をもった医師でもあってほしいと願っています。そして各地で頑張っておられる諸先輩方と一体となって、北海道全土のすべての血液疾患の患者さんに対応できるよう地域医療を盛り上げていきたいと思っています。同時に、世界の北大であるべく、研究の充実にも力を注ぎたいと考えています。そのためにも同窓会の皆様のご指導、ご鞭撻を承りますよう、切にお願いし、ご挨拶とさせていただきます。

# 百寿の「都ぞ弥生」

宮田 陸彦(45期)



“人の世の清き国ぞと憧れた”札幌の四季折々の雄大かつ厳しくも美しい大自然を讃美し、クラーク博士の“貴き野心の訓えを培おう”という若者の気概を見事に歌い上げた「都ぞ弥生」は横山芳介君作歌、赤木顕次君作曲による明治45年の恵迪寮寮歌であり、北大の校歌といっても言い過ぎではないだろう。

本年は「都ぞ弥生」誕生100年にあたり、6月9日に百年記念祭が開催され、延べ千人の参加者がこの名寮歌の百寿を祝った。クラーク会館で行われた記念式典では、横山清恵迪寮同窓会長(昭31年入寮)、佐伯浩北大総長から『都ぞ弥生は北大の宝。末永く歌い継いでいこう』との挨拶が、また齊藤和雄北大連合同窓会副会長(医35期)からは『都ぞ弥生は恵迪精神、クラーク精神、北大の心を伝えてきた。今の時代に求められているのはこの恵迪精神』との挨拶があった。引き続いての作家佐川光晴氏(昭58年入寮)の講演とピアノとバイオリンによる「都ぞ弥生幻想曲」はいずれも大喝采をあげた。

式典のあとは、参加者全員で中央ロンの芝生の上いっぱい、いっぱいの大

円を作って声高らかに「都ぞ弥生」の大合唱。グローバリゼーションの時代らしく各国語(英、独、中、韓、スワヒリ語)に翻訳された「都ぞ弥生」も披露された。最後は肩を組み、足を挙げ、跳びはねて“札幌農学校は蝦夷ヶ島、熊が棲む〜”の大ストーム。50年ぶりのストームは心地よい息切れであった。

夜、京王プラザホテルでの大寮歌祭は齊藤和雄先生と浅香正博医学部同窓

会長も加わっての鏡開きでスタートした。好きな寮歌がアナウンスされると、皆次々に舞台上上がり、声嘎れんばかりに高唱する様子はまさに青春時代へのタイムスリップそのものであった。締めくくりは全員で肩を組み、名残を惜しむかのように「都ぞ弥生」を厳かに朗々と絶唱して大寮歌祭は幕を閉じた。

今回、96歳の最高齢で参加された宍戸昌夫先生(医18期)が昭和11年に作歌された「嗚呼茫々の」はその序があまりに名文であるが故に、今も「都ぞ弥生」の前口上として吟じられている。3年後には「嗚呼茫々の」80年祭が提案されたことを付記して稿を終える。(昭38年寮歌「凋落まさに秋深し」作曲者)

# 春の叙勳

旭日双光章

元ニューオーリンズ日本人会会長  
若林 征子(42期)



一堂集合して大合唱を行う

# ズームアップ⑪ ドイツ一等功労十字章を受章して

金沢大学名誉教授 岡田 晃(30期)



このたびドイツ連邦共和国功労勲章一等功労十字章を受章しました。勲記では2011年9月30日付になっていますが、本年(2012年)4月11日ドイツ大使館(東京)で森喜朗元首相、中村金沢大学長ら関係者の臨席の下、フォルカー・シュタンツェル駐日大使から伝達されました。かつて日独医学交流に尽力された石橋長英先生と同じ勲章なのでびっくりしました。平成18(2006)年に拝受した瑞宝重光章の如く経歴で決まるものでないだけに大変嬉しく、光榮に思っています。シュタンツェル大使の言葉に「たゆまないご尽力と先見の明に基づいたご活躍により、日独両国の科学文化関係に長期にわたって多大な影響を与えた」とありましたが、全く面映い気持ちでもあります。

私とドイツとの関りは、札幌医大助教授になった昭和37(1962)年に始まり、その年ドイツのマックス・プランク労働生理学研究所に留学(1年)した。大野精七元札幌医大学長が北海道日独協会会長であったことで、私は世話人としてお手伝いをし、教授(昭和42年)になっても続き、特に札幌の冬季オリンピック大会では、ドイツ選手団、応援団を歓迎し、また事務局長として国際冬季スポーツ医学会議を開催して冬季スポーツに関する医学的研究の交流をした。余談になるが、私はボブスレー、

リュージュのトレーニング・ドクターとして航空医学実験隊の遠心加速度発生装置で加速度耐性を調べたりしたが、女子リュージュで銅メダルをとるという成果もあった。やがて金沢大学医学部教授として北陸日独協会理事となり、平成3(1991)年日本学術会議第7部(医歯薬学)長として日独医学交流にも力を注いだ。平成5(1993)年金沢大学長に就任して北陸日独協会会長(現在名誉会長)になり、ドイツの大学との間で交流協定を締結したりして学生交流を活発にしたが、この50年にわたる活動が評価されたようである。残照における最後の贈り物であろう。

安倍三史助教授(当時)の少なくとも講師まで請合うとの手紙に誘われて学位をとつてから臨床に進むつもりで衛生学教室に入ったが、その約束を果たすためなのか安倍教授のお力によって3年間の約束(後任は決まっていた)で福島医大の助教授になった。29歳だった。3年後臨床に移るため週2日程栗野内科に顔を出していた。やがて外国留学もしてみたくなり、アメリカ、ドイツの大学、研究所へ論文の別刷(英文抄録)を送り、3ヶ所程から承諾の返事もらった。マックス・プランク財団から奨学金800マルク(当時の助教授給料の数倍)が提示されたこともあり、ドイツに決めた。ところがまた安倍教授のご

尽力で札幌医大助教授になり、就任して1年分の講義を集中してすぐに留学した。やがて西野教授の御停年で教授選考がはじまるが、私が若造だったせいもあり、年長者の慶大助教授、元東大助教授、東京医歯大助教授が応募し、敗れば話のあった猿払の診療所にも勤めようと考えていた。それがドイツ好きであった永井(生理)、宮崎(生理)、末吉(眼科)、三木(経済)諸教授のお力添えもあって37歳で教授に就任することができた。ここでもドイツの恩恵を受けているのである。

金沢大学への赴任のいきさつは「宜雨宜晴」(北大医学部同窓会誌、1999)に述べたが、結局大学紛争のあおりで42歳で日本公衆衛生学会長を務めることになり、これがばねになったのか、12の国際・全国学会の会長に就任し、それらの名誉会員になっている。学位授与者も80人に及び、数多くの教授が巣立っていった。55歳で学会推薦制になった日本学術会議会員に選出され、3期9年、第15期では初代の塩田広重先生(柳荘一教授の恩師)に始まる第7部長に東大関係者以外として珍しく選出さ

れた。私よりも年長者の伊藤正男先生(文化勲章受章)が副部長、渥美和彦、金岡裕一両先生を幹事として「ゲノム・プロジェクトの推進」、「尊厳死」などに取り組んだ。前田藩主、第九師団長に次いで金沢大学長として金沢城最後の主になったが、角間に移転し、その広さは全国第4位になっている。国立大学協会理事6年、国大協副会長には某大学総長と3回同数になりくじで敗れたが、国公立の大学長で構成される大学基準協会副会長にも選任された。さてこの機会に札幌の地下鉄のゴムの車輪は、防振対策で私がすすめたもの、乗るたびにほくそ笑んでいることも申し添えておきたい。

これまで晴れには恵まれていたようであり、雨、いや厳しい嵐に飛ばされることもあったが、この受章で今は晴れやかな気持ちになっています。



フォルカー・シュタンツェル大使からの勲記の伝達(東京・ドイツ大使館にて)



### 名誉教授 高橋香織先生(22期)を偲んで

北海道大学保健センター長 教授 武藏 学(51期)

北海道大学名誉教授高橋香織先生は平成24年6月19日に逝去されました。享年88歳でした。

先生は大正13年3月31日札幌市に生まれ、昭和21年9月北海道帝国大学医学部医学科を卒業され、同26年10月悪性腫瘍の臓器特異性に関する研究で医学博士の学位を授与されました。昭和21年1月から同39年8月まで美幌町立国民健康保険病院長として勤務し、北海道の地域医療に多大な貢献をされています。昭和39年8月北海道大学医学部助教授(医学部保健診療所長)に任ぜられ、同47年7月からは北海道大学保健管理センター初代所長(昭和48年2月より医学部教授併任)に任命され、同61年3月の退職まで22年余の長きに渡って務められました。特に大学紛争時の診療所長としての御活躍、保健管理センターの創設期にセンターの整備充実に尽力されたことは高く評価されています。退官後は昭和61年4月から平成5年3月までNTT札幌病院長に就任して市民の健康のために尽力され、その後も市内の老健施設で高齢者医療に長く従事されました。

先生の特筆すべき研究活動は北海道大学における学生・教職員の健康管理を通じ

て「臨床保健学」とも言うべき分野を創設されたことにあります。本学学生・教職員のための健康管理体制を確立し、大学保健管理の模範となる体系を完成されました。学外においては全国大学保健管理協会『大学生の健康白書』編集委員として全国の大学生の健康に係る膨大な資料を集計・解析され、また、協会役員として協会の運営・振興に貢献されました。さらに、同協会北海道地方部会の代表世話人として北海道における大学保健管理業務の向上のためにも多大な貢献をされました。以上の功績により平成14年5月、勲三等瑞宝章を授与されました。

かつて、私が健康診断の内科診察で保健管理センターにお手伝いに向って、受け持ち患者の急変のため病棟に戻らなければならなかった時にも、先生は「お、いいよ、後はやっておくよ」と快く交代して下さいました。アユ釣りを愛され、巨人の大ファンでいらした先生の暖かいお人柄がなつかしく想い起されます。

私たちは先生の御意志を継いで、本学学生・教職員の健康維持・増進のために一層努めてまいります。ここに謹んで哀悼の辞を捧げます。



### 名誉教授 宮崎 保先生(32期)を偲んで

北海道大学大学院医学研究科 がん予防内科学講座 特任教授 浅香 正博(48期)

北海道大学名誉教授宮崎 保先生は平成24年8月26日にご逝去されました。

先生は、昭和31年3月北海道大学医学部医学科を卒業し、北海道大学医学部附属病院において1年間の実地修練を修了した後、昭和32年4月高杉年雄初代教授が担当されていた北海道大学医学部内科学第三講座に入局されました。その後、昭和48年8月に東京女子医科大学血液内科助教授として赴任され、昭和49年3月に血液内科の初代教授に昇任されました。昭和54年8月母校である北海道大学医学部内科学第三講座教授に就任され、平成6年3月31日の退官まで一貫して内科学の教育、研究、診療に従事されました。

先生の研究は臨床、基礎を通じて広範、多岐にわたりますが、血液学および腫瘍学に集約されます。第一は学位論文以来のフェリチンを中心とした鉄代謝に関するもので、肝障害時のフェリチンの動態の解明、赤血球フェリチン測定の意義などを明らかにしました。第二は、白血病細胞の増殖、分化における細胞内シグナル伝達、特にプロテインキナーゼCとチロシンキナーゼに焦点を当てた研究で成果を挙げました。第三は、骨髄移植の基礎的研究と臨床への

展開で、北海道大学病院に初めて骨髄移植を導入し、多くの白血病および悪性リンパ腫の患者を治療いたしました。基礎研究の成果として骨髄細胞の脾臓内移植によりGVH反応を軽度抑制できることを解明しました。

先生は、これらの診療、研究を通じて多数の内科医、血液及び消化器専門医の育成に当たり、その薫陶を受けたものは300名以上に及び、道内はもとより国内外各地においても診療、研究に活躍しております。さらに、毎年中国、韓国、ブラジル、アルゼンチン、アメリカなどから留学生を迎え、医療を通じて国際交流にも貢献をされました。

学内にあっては、北海道大学医学部付属病院長および北海道大学評議員を歴任し、医学部および同付属病院の運営、発展に尽力されました。

これらの研究業績に対し、平成2年に北海道医師会賞、平成5年には北海道科学技術賞を受賞されています。

定年退官後は、札幌通信病院の病院長に就任され札幌市の地域医療にも貢献されました。先生は長い闘病生活の後、本年8月、享年82歳の人生を終えられました。心よりご冥福をお祈り致します。

## 新世紀の医学に向けて (20)

### オール北海道で取り組む橋渡し研究支援拠点形成事業 — この5年間の総括と今後の展望 —

北海道臨床開発機構副機構長  
北海道大学探索医療教育研究センター長  
安田 和則(52期)



科学技術立国を目指す日本にとってライフサイエンスは最重要研究領域の一つであり、この領域における近年の基礎研究の発展には目覚ましいものがあります。しかしその成果が臨床・創薬の現場に届かず、国民に還元されないという問題が認識されてきました。その原因の一つとして挙げられたのが、橋渡し研究の支援体制が十分ではないということでした。基礎研究の成果を臨床に応用する時の困難を指す「死の谷」を越えるための「橋渡し研究(トランスレーショナルリサーチ:TR)」とは、実は研究ではなく「事業」です。そしてそれには然るべき体制の構築が必要です。こうした状況の中で平成19年に文科省「橋渡し研究支援推進プログラム」が始まり、北海道大学、札幌医科大学、旭川医科大学が協働する「オール北海道先進医学・医療拠点形成事業」はこれに採択されました。そこで「北海道臨床開発機構(HTR)」が組織され、橋渡し研究拠点を北海道に確立するための基盤整備事業が、今思えば、ほぼゼロから始まりました。私は平成21および22年度に医学研究科長を務めました。その時に北海道におけるこの事業の重要性を痛感し、その任期終了後はHTR副機構長・北海道大学探索医療教育研究センター長としてこの事業に専念し、機構長である佐伯北大総長を補佐して参りました。このプログラムは本年3月末をもって終了し、今、第二期プログラムがスタートしまし

たので、この5年間の北海道におけるTR拠点形成事業を総括し、今後の展望について報告させていただきます。

平成24年3月に東京で開かれた文科省橋渡し研究支援推進プログラム平成23年度成果報告会において、「このプログラムは全国7拠点を成功裏に終了した」と公式に発表がありました。この中で「オール北海道先進医学・医療拠点形成事業」は当初から設定されていた2件の医師主導治験開始という高い目標を完全に達成し、また人材の育成やネットワークの構築などの基盤整備を着実に進め、特長のある「北のTR拠点」として高い評価を受けることができました。この事業の成功により、アカデミア発の基礎研究の成果を世界のルールに従って実用化につないでいく体制が、北海道に初めて整備されました。またこれまで道内でばらばらに行われていた臨床応用を目指す基礎研究が、HTRの下でひとつのパイプラインとして把握されました。そしてそれらを踏まえたこの事業成功の最大の意義は、国策としてのTR支援事業をこの北海道が担っていくための人的および知的基盤が構築されたこと、およびそれを推進する人の強い意識(覚悟)と今後への確かな自信が形成されたということにあります。私はこれこそが「拠点」の意味であると考えます。我々関係者一同はこれらの意義と責任を深く認識し、将来へ向かってこの拠点を前進させる覚悟です。この5

年間のHTRの活動に深いご理解とご支援をいただいた北海道大学および北海道大学病院、札幌医科大学、旭川医科大学に改めて深謝申し上げます。そしてこの事業の成功は、事業現場における関係者の尽力があつて可能であったことを、改めて報告させていただきます。特に実務の指揮を執った白土博樹教授(統括部長、ネット推進部長)、佐藤典宏教授(臨床情報管理部長)、永井榮一特任教授(企画部長)、小森元章事務局長をはじめ、情熱と使命感をもってこのHTR事業を推進してきたすべての関係者に感謝します。

第一期事業の成功を受けて、平成24年4月から第二期プログラムに当たる文科省「橋渡し研究加速ネットワークプログラム」が始まり、我がHTRはこのプログラムにおいて今後5年間の事業の継続が認められました。今後のHTRには北海道に留まらず、その特長を生かして他の拠点をもリードする活動が期待されています。時、折しも、平成24年5月に北海道大学病院が臨床研究中核拠点病院に選定されました。これは、「TRや臨床研究を行う義務を有する病院」と定義されている大学病院(特定機能病院)にとって、その将来を決定づける朗報です。福田病院長を始めとする北海道大学病院関係各位のご尽力に心から敬意を表します。この選定にはTR事業を成功裏に進めている北海道大学の実績が影響したことは間違いなく、HTR関係者にとって

こんなうれしいことはありません。医学研究科と大学病院が表裏一体であるように、HTRと臨床研究中核拠点病院とはその任務の差をよく理解しつつ、互いに相補的な連携を図っていきたく思います。

HTR事業における今後の課題としては、マネジメントの強化、国際競争力の強化、投資効率を考えた自立化への前進の三つのポイントが挙げられます。今後のHTRではリソースを効率よく管理し開発を推進する体制、後続シーズパイプラインを評価・維持する体制、研究・開発・企業への引き渡しを一貫して行える体制、等を更に強化することにより、TRマネジメントのさらなる強化を図りたいと考えます。またアカデミアが戦略的に獲得した知財権を有効利用する体制や、国際的申請がすぐに可能なデータ収集を行える体制を強化することにより国際競争力の強化に取り組んでいきたいと思ひます。またこれまで構築してきたTRネットワーク事業の発展も重要な課題です。それらの活動における一つ一つの成功の積み重ねることにより、アカデミアにおけるTR事業拠点の経済的自立を実現したいと考えております。そして、この本邦の将来を担う国策としてのTR事業を、北海道を挙げての推進することが日本の発展、各大学の発展、そして産学連携を介して地域の発展に寄与することになると信じております。

# 「各地区フラテ会だより」— 神奈川支部の活動 —

幹事 仁保正和(43期)、市川靖史(62期)

神奈川支部は年一回総会と学術講演会を開催し支部会員の親睦の場としている。今年には谷口直之先生(43期)をお招きして日本学士院賞受賞を祝った。演題名は「糖鎖と疾患の診断と治療における役割」であり、数多くの事柄について丁寧にお話しいただいた。23名の支部会員が出席し、終止和やかな会だった。これは谷口先生の人柄がよく現れた講演と受賞をこころから喜ぶ同窓が集ったためだった。ここには同窓会のあるべき姿があった。その様子は神奈川フラテ会HP(管理者 市川靖史)に掲載されているので、ご覧いただきたい。

一方神奈川支部の同窓会活動は社会情勢の変化のなかで転機を迎えているが、この転機は他でも同様であろう。神奈川支部はその変化に対して新たな取り組みをして活動を継続することを考えている。医学部同窓会支部が転機を迎えて、どのようにしてそれらを乗り切ろうとしているのか、情報があれば幸いである。また連携することができる支部があるならば連携することで支部活動は飛躍すると考えられるので、お知らせいただきたい。

私は谷口先生の同期として講演に先立って紹介をした。なお日本学士院賞受賞に対してフラテは昨年7月記念講演会を開催して祝福し、その様子は昨年10月5日の医学部同窓会新聞に記されているので、経歴は重複を避けた。次に一部を掲載する。

谷口先生は同窓会新聞のなかで「糖鎖の研究」について、「[ゲムや蛋白質の研究に比べると派手さはなく研究費にも恵まれなかったが、時流に流されず、また流行を追わなかったことが幸いした]と述べています。それを読んで、彼の家が定山溪から流れてくる細いきれいな川の傍にあったことを思い出しました。よい思い出のひとつにこの川の傍で料理がお上手なお母さんが作られたおいしいタレでジンギスカンをご馳走になったことがあります。時流に流されず、また流行を追うことがなかったことは彼が豊かな自然のなかで育ち、また雪解けの頃、夏の渇水の頃のこの川の流れを見て共に生きてきたためではなかったかと考えています。

学校では彼はよく質問をする勉強熱心な学生でした。英語とドイツ語の勉強会に所属していましたが、世界に飛躍することを夢見ていたからでしょうか。ドイツのある教授が学生に講演したとき、彼は臆することなくドイツ語で質問し、改めて英語で質問し直していたことも思い出にあります。私には内容を理解できませんでしたが、彼のディスカッションの態度は対等でした。

彼はいまも学生時代と変わっていないように見えます。学問に貪欲であり続けたこと、一筋の道を迷うことなく歩んだことが数々の賞の受賞につながったと思います。

以上が同期としての紹介だが、これらは皆さん方にも知っていただきたいことだ。

講演は多くの事柄と業績についてのものだった。学士院賞授与理由には彼の先駆的業績とあったが、業績はそれだけではなく今日まで積み重ねられていることが分かる講演だった。

講演後川上正也、松浦信夫両北里大名誉教授、力石辰也聖マリアンヌ医大教授、前田慎横浜市立大教授から質問とアドバイスの依頼がなされた。谷口先生は人柄が表れた丁寧な説明をされていた。

懇親会でもその余韻が引き続いてあった。参加者の自己紹介の時松浦信夫北里大名誉教授は北里大で北大出身者が多かった時「北の風」といわれていたことを話された。皆の思い、「北の風よ、吹け」を話されたのだ。武宮省治神奈川がん臨床研究・情報機構会長から機構\*)について紹介があり谷口先生も興味を示されていた。その一方でかつて谷口先生の講義を聴いた何人かの後輩から「講義が難解だったことや追試が多かったこと」が話されたので一層和やかさが増した。

一般論としてこのような会のあり方を考えるとき、今回の同窓会の姿にはそのあるべき姿が示されているのでこの会の姿を追求することが望ましいことといえる。神奈川支部で以前何年かに一度開かれていた会は単なる同窓会、昔話と寮歌の会、だった。しかし同窓の講演を同時に行うことが行われるようになってから毎年開催されるようになっただけでなく、盛り上がり

がある会になった。相乗効果を挙げているといえる。神奈川支部でこの形式の会がもたれるようになったのは現顧問の関本信先生(23期)が15年前に会長になってからのことだが、その他に共催会社として尽力してくれたエーザイ(株)の力があつたことが毎年開催を続けることができた理由のひとつであることは明らかだ。

しかし厳しい社会情勢のため今年をもって共催会社がなくなることになった。

神奈川支部ではこれまでと同じように共催会社を得て同じ形式の会の開催を続けたいと考えているが、そのためには支部同窓会本来の目的を追求することと同時に共催会社を得ることができる体制をつくるのが先決になるので世話人一同知恵を絞っている。

次の案が検討されている。

- 1 出席者の増加;若い会員の参加が必要になる。これまでは教授クラスの同窓の講演を主としてきたが若い会員をも講演者にする。これは若い同窓の出席を増やすためによいことだろう。
- 2 神奈川フラテ会の名称;名称を分かりやすいものにする。神奈川フラテ病診・診々連携の会など。この時主催は「神奈川フラテ病診・診々連携の会」、共催は「北海道大学医学部同窓会神奈川支部・製薬会社」となる。
- 3 神奈川フラテ会HPの充実と北大の医療のアピール;HPは既に完成しているがさらに魅力あるものにしていくために、総会出席者名、勤務先などを掲載する。いまHPを見て受診する患者は多いので、HP上で北大の医療を周知させるために「病診・診々連携の会」をアピールする。  
“病診・診々連携の会”としてアピールする真の目的は北大の医療を広く市民に還元するためである。
- 4 医学部同窓会新聞への報告;支部と会員の活動の実際を同窓会新聞に報告して支部会員を含めて会員に広く知らしめ、意見を聞き、さらに共に活動できる支部を募る。
- 5 学生の参加;学生が参加することは会

の活気を増すことになる。私は教育の本質は“マンツーマン”にあると考えている。幸い県内の教育機関の長を務める後輩たちはひととしても優れているので学生が彼らを知ることは将来の選択のためによいことだ。④とともに同窓会本来の目的を果たすことでもあるだろう。

最後に改めて鈴木章先生のノーベル賞受賞と谷口直之先生の日本学士院賞受賞の喜びを述べたい。受賞が重なったことによる北大アピールの効果は倍増に留まらないだろう。OBにとってこの上ない喜びだ。

“北の風よ、吹け”を合言葉にして、神奈川支部もその喜びのなかで活動を広げようとしていることを報告したい。

\*) 神奈川がん臨床研究・情報機構;本機構は神奈川県の対がん戦略の一つの柱として平成18年に設立された。神奈川県、全国10大学、理化学研究所横浜研究所、医薬関連会社等、39組織が会員となっている。機構には腫瘍組織センターとがん情報センターがある。

前者では主に神奈川県立がんセンターで手術の際摘出された組織の一部を新鮮凍結組織、パラフィンブロックとしたもの及び血液を「腫瘍組織センター」で管理・保存している。10年間で6,000例を目標としている。これらの試料は産学公の連携によりがんの新しい診断法、新薬の開発等の臨床研究の促進を図るため研究課題審査会、倫理委員会を経て会員に提供されている。平成23年度までに新鮮凍結組織は延べ1,600件以上が大学、研究所、製薬会社の研究室へ提供され患者に優しいオーダーメイド医療実現を目指している。

後者はいわゆるがん難民対策としてがん患者・家族の方々に適切な情報を提供するがんの電話相談が主体であり、5年半で1万件以上の相談を受けているが県外や外国からの相談もある。また県内のがん診療に特化した最新の診療施設の情報を提供し受診の参考にして頂いている。

(43期 武宮省治)



谷口直之先生を囲んで。25期(二宮新次郎先生)~84期(島秀栄先生)の同窓が楽しいひと時を過ごした。



講演する谷口直之先生。

# フラテ祭2012開催報告

## フラテ祭実行委員会事務局

去る9月16日(日)、本年度で6回目となる「フラテ祭2012」が医学部で開催されました。同窓生、教員、学生父母、関連企業、医療関係者の方々など延べ約200名が参加されました。開催会場は2010年7月に完成した医学部学友会館「フラテ」(以降、フラテ会館)のホールと大研修室で、例年同様、多くの参加者にお越しいただきました。

第一部では、施設・キャンパスツアー

を行いました。ツアーコースは「医学部施設巡り」、「北海道大学病院巡り」、「キャンパス巡り」の3つ設け、多くの方々にご参加いただきました。

第二部の講演会では玉木長良医学部長が「北海道大学医学研究科・医学部の現況」、福田諭北海道大学病院長が「北海道大学病院2012」、丹治順東北大学包括的脳科学研究・教育センター顧問が「今、脳科学が面白い」と題して講演されました。

その後、第8回目となる音羽博次奨学基金授与式が行われ、13名の学生に奨学基金が授与され、音羽先生にも会場にお越しいただき、華やかなうちに式典が終了しました。

第三部のフラテ交歓会は、ホールにて、玉木長良医学部長の開会挨拶、北大男声合唱団による「都ぞ弥生」・「学友会歌」の合唱が披露されました。また、場所を移して大研修室では、齋藤和雄元北海道大学医学部同窓会会長の祝杯により開宴し、祝宴では学生による弦楽四重奏に耳を傾けながら和やかな雰囲気で行われました。また、同窓生と北大男声合唱団が一体となり「都ぞ弥生」を合唱しました。そして最後に福田諭北大病院長による乾杯にて締め括られました。

多くの皆様のご支援とご協力をいただき今年も無事にフラテ祭を終えることができました。この場を借りて御礼申し上げます。



第1部 施設・キャンパスツアー



第2部 講演会～玉木長良医学部長



第2部 講演会～福田諭北海道大学病院長



第2部 特別講演～丹治順先生(42期)



音羽博次奨学基金授与式



第3部 男声合唱団による都ぞ弥生



第3部 祝杯～齋藤和雄元北海道大学医学部同窓会会長



第3部 写真で振り返る医学部90年の歴史～寺沢浩一先生

## 平成24年度 フラテ研究奨励賞公募!!

平成24年度フラテ研究奨励賞を次により募集します。

昨年は11名の若手会員から応募があり、フラテ研究奨励賞選考委員会において厳正な選考を行った結果、4名の受賞者が選考されました。

2月13日(月)の総会で授賞式が行われ、会長から受賞者に表彰盾及び研究奨励金50万円が贈呈されました。

本賞は平成24年度で第10回を数えることとなりますが、更に多くの若手研

究者が応募されることを期待します。

### 1. 公募期間

平成24年12月1日から同月31日までの一ヶ月間(郵送の場合は12月31日までの消印は有効とします。)

### 2. 応募資格

平成24年度末日(平成25年3月31日)において40歳未満である本会会員

### 3. 応募の書類

①「北海道大学医学部同窓会フラテ

研究奨励賞申請書」及び関係書類各6部(コピー可)を同窓会事務局に申請してください。

②指導教授または関連施設の長等の推薦書を必ず添付してください。

③申請書の様式は同窓会ホームページ:  
<http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w//> からダウンロードできます。

### 4. 授賞件数および賞の内容等

- ①授賞件数 4件以内
- ②賞の内容 表彰盾及び研究奨励金50万円
- ③研究奨励金の使途 特に限定しておりません。

### 5. 選考結果の発表等

①受賞者が決まり次第、北大医学部の掲示板で発表します。

②応募者には文書により選考結果を通知します。

③同窓会新聞に受賞者の氏名、受賞対象の研究課題及び選考経緯等を発表します。

### 6. 授賞式

総会(平成25年2月開催予定)において実施します。

### 7. その他

- ①受賞者には、授賞式の出席及び同窓会新聞の投稿をお願いします。
- ②ご不明の点は同窓会事務局にお問い合わせください。

Tel・Fax 011-706-5007

E-mail [furate@med.hokudai.ac.jp](mailto:furate@med.hokudai.ac.jp)

## フラテ99号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部

同窓会新聞をご覧の皆様、いつも学友会雑誌フラテをご購読いただき、誠にありがとうございます。皆様の暖かいご支援により、今春発行の98号も大変ご好評をいただきました。

さて我々フラテ編集部では、現在99号発行に向けて準備を進めております。99号の発行は、来年2月下旬を予定しております。購読をご希望の方は、同封の振込

用紙にてお支払いをお願い致します。注文および支払方法を、郵便振込みによる前払いとさせていただきますことにご理解をお願い致します。

また、当編集部には98号以前の残部もごございます。ご希望の方は、99号をお申し込みの際に、振込用紙にその旨をお書き添え下さい。別途、送らせていただきます。

なお、フラテの申し込みは9月と1月の2

回受け付けております。例年、二重に申し込みをされるケースが見られます。ご注意ください。

また、98号を申し込まれた方で、まだお手元に届いていない方もどうぞフラテ編集部までご一報ください。

### <99号の主な内容>

- ・特集記事
- ・フラテ各地を行く福岡編>

- ・教室便り
- ・新任教授のご紹介
- ・学年紹介
- ・部活紹介
- ・各講座新旧名称一覧
- ・茶苑
- ・学生の広場 など

※フラテ編集部へのご連絡・ご照会  
は下記宛にお寄せくださるよう、  
お願い申し上げます。

### フラテ編集部

TEL/FAX 011-736-1444(留守電あります)  
E-mail: [frate.med@gmail.com](mailto:frate.med@gmail.com)

# 告知板

## <教授就任挨拶>

広島国際大学  
医療経営学部

江原 朗(63期)

平成23年4月に、広島国際大学医療経営学部の教授に採用いただきました。このたびは同窓会新聞に寄稿の機会をいただき、感謝申し上げます。

私の研究分野は医療政策です。医師不足は研究テーマの一つです。

地域医療の問題は医師不足に限りません。自治体病院の労務管理は不適切です。平成14年3月以降200床以上の自治体病院の半数以上が労働基準法違反を指摘されています。一方、患者数が少ないために多くの自治体病院が赤字を計上しています。

医療を考える際には、病院を単位とするのではなく、地域を単位としていかなければならないかと存じます。そのためには医療圏を広域化し、各医療機関の役割分担を明確化する必要もあるでしょう。北海道医療のさらなる充実が図られることを祈っております。

東北大学  
東北メディカル・メガバンク機構

中谷 純(71期)

このたび、東北大学 教授、東北メディカル・メガバンク機構医療情報ICT部門 副部門長(医学部・医学系研究科)を拝命いたしました平成7年卒(71期)の中谷 純と申します。東北メディカル・メガバンク事業においては、世界最高峰の次世代生命医療情報基盤を構築し、未来型医療・新産業創生・地域医療福祉連携に資することで、東日本大震災からの復興の核、医学発展・日本再生の牽引力となることを期待されております。北大卒業生として、全力で事にあたる所存ですので、ご指導・ご鞭撻を賜りたく何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## <学内・院内人事異動>

### <辞職>

平成24年6月30日 大平 洋(会員2) 内科I助教(カナダ オタワ大学 留学)  
平成24年8月31日 氏家 英之(78期) 皮膚科助教(米国ナショナルインスティテュートオブヘルス研究員)  
平成24年9月30日 有田 賢(73期) 皮膚科学分野助教(小林皮膚科クリニック)

### <採用>

平成24年6月 1日 千葉 知(69期) 循環器内科特任助教  
加藤 達哉(73期) 循環器・呼吸器外科特任助教  
夏井坂光輝(75期) 消化器内科I助教  
新宮 康栄(77期) 循環器・呼吸器外科特任助教

平成24年7月 1日 天野 虎次(76期) 腫瘍内科学分野特任助教  
渡部 拓(77期) 内科I助教  
平成24年8月 1日 石田 雄介(75期) 腫瘍病理学分野特任助教  
豊嶋 崇徳(会員2) 血液内科学分野教授  
夏賀 健(79期) 皮膚科助教

### <昇任>

平成24年9月 1日 井上 猛(60期) 精神医学分野准教授(北海道大学病院講師)  
久住 一郎(60期) 精神医学分野教授(同分野准教授)  
木下 一郎(64期) 腫瘍内科学分野准教授(同分野講師)  
鬼丸 力也(71期) 放射線医学分野准教授(同分野講師)  
岩崎 倫政(会員2) 整形外科分野教授(同分野准教授)

### <休職>

平成24年7月 1日 竹内 啓(76期) 腫瘍内科学分野助教(H24.7.1~H26.6.30 テキサス州立大学MDアンダーソンがんセンター)

## <同期会案内>

### ★73期同期会報告

73期のみなさま、こんにちは。かねてより連絡しておりました同期会が、平成24年 9月22日(土)午後6時より、札幌パークホテルにて開催される予定です。と言いつても、本原稿の締切日が同期会の前日なものですから、皆様の目に触れる頃には 終了していることと思います。来年の同窓会誌には、写真付きで同期会の状況をご報告できるようにしたいと考えております。なお、ご存じの方も多いかと思いますが、

さる7月17日に同期の高橋大輔君がご逝去なさいました。メーリングリストに参加している方は詳しい状況をお分かりかと思いますが、謹んでご冥福をお祈りいたします。なお、メーリングリストに参加希望の方は、西田:nishiryu@huhp.hokudai.ac.jpか野呂(湯浅)さん:norochan5102@doccom.ne.jp経由で管理者に連絡させて頂きます。近況報告も含めよろしくお願ひ致します。



## 新刊書紹介

**「がん」と「感染症」からみたアジア人の「生と死」**  
小林 博著(28期)  
公益財団法人  
札幌がんセミナー発行

本書はそのタイトルにあるように、豊富な最新保健データを活用して、著者が訪れたことのある主にアジア諸国の人々の「生と死」の実態を浮き彫りにした紀行文である。しかし、これは単なる見聞録に留まらない。著者の造詣の深さに眩暈さえ覚えるほどの博学さで諸国民の生と死の背後を形作っている歴史と文化までも切り取っている。

不肖私も仕事柄、アジア諸国を訪問し、その土地での健康問題に携わる機会はずいぶんある。しかし、なぜタイの喫煙率の下がり方が鈍いのか、なぜカンボジアの人たちの仕事ぶりが無気力なのか、なぜアジアの女性に小太りが多いのかという問いをほとんど考えたことがなかったのだが、本書を読むことによってそうした問いがカラコロと氷解していく思いがした。

本書にユニークさを与えていることは、巻末に著者の「健康長寿のための条件」が記されている点。これを読んで私は江戸中期に儒学者貝原益軒が著した「養生訓」を思い出した。養生訓には生活習慣病を予防するために現代にも活用できそうな具体的記載が多く、私も時々引用する書なのだが、そこには誤りも結構ある。

一方、本書は現代のがん病理学者による科学的見解に裏打ちされた知恵と経験に基づいた12カ条である。しかし、両者にはゆとりや達観の心を大事と説く共通点が多いし、

著者と貝原益軒がともに80歳半ばというほぼ同年齢に書き綴った点も面白いと思う。

(63期 湯浅資之)

※本書は非売品ですが入手希望の方は公財札幌がんセミナー (FAX:011-222-1526、e-mail:scs-hk@phoenix-c.or.jp) にお問い合わせ下さい。紀伊國屋書店札幌本店でも購入可能です。



ポリオワクチンを受けた子どもは左の小指に緑のインクをつけて目印とする(国際ロータリーのポリオ撲滅キャンペーンから)



「NEW 予防医学・公衆衛生学 (改訂第3版)」  
岸 玲子(48期) 他編  
南江堂  
¥6,300

本書は、幅広く読まれてきた公衆衛生学の代表的な教科書の新版である。北大公衆衛生学の前教授で、現在は同大環境健康科学研究教育センターの教授として活躍しておられる、岸玲子先生が編者の一人として編纂された。この本の特徴は、多くの執筆者により、公衆衛生学の幅広い領域についてわかりやすく、しかし必要に応じてかなり深く解説されている点である。恥ずかしながら学生のころは、公衆衛生学は医学のごく一部の狭い学問領域であると誤解していた私にとって、この本で示されている公衆衛生学の深さと幅広さには改めて驚かされる。医師国家試験について定めている医師法第9条には「臨床に必要な医学及び公衆衛生に関して」試験をすると書かれている。このことから分かるように、公衆衛生学が取り扱う領域は、医学の枠組みを越えて広がり、しかし医師にも必要なものが大半を占めている。再興感染症、環境問題、産業衛生、メタボリックシンドローム、精神衛生、高齢者の生活、包括的保健医療、医療保険制度と医

療費、などなど、気がついてみれば日常のニュースで取り上げられる話題にも、公衆衛生学に関連したものが増えている。新たなデータや示唆に富むコラムが満載された本書では、最新の公衆衛生学を手軽に、多角的な視点から学べる。卒前の医学生や医療系の学生にはもちろんのこと、大学院生や関連領域の研究者、そして医療や保健活動に携わる人にもお勧めする。

(会員2 大滝純司)



「首・肩・腕の痛みとしびれをとる本」  
井須 豊彦(49期) 著  
講談社  
¥1,260

井須豊彦先生は北大脳神経外科の初代教授故都留美都雄先生(19期)の門下生の一人である。2代目教授阿部弘先生(37期)並びに3代目教授岩崎喜信先生(47期)の専門領域である脊髄外科グループの一員として北大脳神経外科で活躍後、北大脳神経外科講師を経て、平成元年に釧路労災病院に赴任した。この間、脊髄外科の発展に大きく貢献し、現在、日本脊髄外科理事、脊髄外科指導医として活躍している。彼の正確な診断と卓越した手術技術は全国的にも高く評価され、今でも本州からの若い医師が勉学に来ている。

これまでも脊髄外科関係の教科書を出版しているが、このたび、専門書ではなく、一般の方向けの本として出版された。本書では首・肩・腕の痛みとしびれを引き起こす病気のことや、病気の診察・診断の進め方、さまざまな治療法、日常生活の注意点に至るまで豊富なイラスト共に詳しく解説している。頸椎・頸髄疾患を持つ患者さんの立場に立って、治療選択へのアプローチを手引きしてくれる。特に診断、治療に難渋するしびれ、痛みを診察する機会のあるクリニックの

先生や研修医、看護師、理学療法士に必読の書として推薦したい。

(46期 草野満夫)



「文明の十字路口から一医師のアラブ=チュニジア記-」  
本田 徹(49期) 著  
連合出版  
¥1,575

本書は今から30年以上前の1977年2月から79年4月までの2年余り、文明の十字路口と呼ばれている、北アフリカのチュニジアのジェルバ島に赴き、青年海外協力隊の一医師として働いた本田徹君の体験記です。彼は北大卒業後4年目で、ほとんどアラビア語とフランス語しか通じないチュニジアに渡ったのです。しかしこの本は単なる体験記ではなく、かの国の歴史・政治・社会を真摯に理解しようと学んだ証であり、またかの地の人々との心の交流を通して、人々の暮らしや信仰(イスラム教)を学び、その結果として彼はプライマリ・ヘルス・ケア(以下PHCと略)の重要性を認識しました。その経験が帰国後、日本でPHCを実践していた佐久総合病院の若月俊一先生の元へと向かわせ、さらに日本や発展途上国での、PHCの概念に基づくシェア(=国際保健協力市民の会)の活動へとつながっていったのです。

若月俊一先生は本書の推薦の言葉を述べ、そして医学書院発行の「週間医学界新聞」2000年4月17日付の増刊号「読書特集：医学生・研修医のために私が選ぶこの10冊」の一つに本書を挙げております。これからのアラブの世界は？ 発展途上国の医療援助はどうあるべきか？ また日本でも、患者さんの置かれた状況を踏まえた医療の大切さを本書から学ぶことは、これからの医学生や若い医師の視野を大いに広げてくれるでしょう。

(48期 山田 豊)



「チェルノブイリ原発事故がもたらしたこれだけの人体被害」 松崎 道幸 監訳(51期) 合同出版 ¥1,680

原発事故の健康障害の多様さ・・・ チェルノブイリ事故から学ぶ

核戦争防止国際医師会議 (IPPNW) のドイツ支部は、チェルノブイリ原発事故から25年後の2011年に、チェルノブイリでの実地調査と多くの研究文献の評価の結果に基づいてチェルノブイリ原発事故の影響に関する報告書を発表した。本書は、その邦訳書であり、監訳者は、51期の松崎道幸氏。現在、深川市立病院内科部長で、IPPNWの活動に協力する「核戦争に反対する北海道医師・歯科医師の会」の運営委員でもある。

本書では、チェルノブイリ事故により、これまでのIAEAやICRPの見解では到底説明できない広汎で深刻な健康被害—たとえば、数mSvの低線量被曝でもがんが有意に増加、ICRPなどが主張する閾値線量を遙かに下回る被曝で先天性障害が発生、被曝住民には、がんだけでなく、多様な疾患と体調不良が激増、等々が発生していることや、発生が予測されることが述べられている。チェルノブイリ事故による健康障害の実態こそ、福島原発事故の影響の予測と適切な対策のために、真っ先に学ぶべき必要があることといえる。

本書の本文は、事故の影響についてのこれまでの研究の要点をできる限り

簡潔にまとめたものであるが、訳者の努力で、多くのオリジナルの図表入りの訳注の挿入とフリーアクセスの論文のリンクが多数採録されており、それらが、本文の簡潔さを補って、より深い理解を助けてくれる。矢ヶ崎克馬琉球大学名誉教授による解説も示唆に富んでいる。

(41期 福地保馬)



「磁気共鳴画像学」 松澤 等(62期)他著 日本医事新報社 ¥8,610

新潟大学脳研究所で物理工学と医学の両方に携わっている研究者3名の共著である。著者のうち2名が医学博士である。その一人の中田力先生は、fMRIを用いた脳神経学の世界的権威である。1976年に東京大学医学部医学科を卒業され、『脳の方程式 いち・たす・いち』、『穆如清風 — 複雑系と医療の原点』などの著作がある。もう一人の松澤等先生(北大医62期)は、1986年に北海道大学医学部脳神経外科に入局。1992年から4年間、カリフォルニア大学デービス校で、当時同校の教授になられたばかりの中田先生のもと、Research Fellowとして研究に従事。1998年からは新潟大学脳研究所の助手となり、同研究所の教授になっていた中田先生のもとでMRIを用いた研究を続け、現在は同研究所・統合脳機能研究センターの准教授である。磁気共鳴画像(MRI)には様々な撮像法があ

るが、新しい撮像法や撮像技術も次々と登場してくる。本書は、MRIの個々の撮像法を詳説するのではなく、MRIに反映される磁気共鳴現象、あるいは、MRIで捉えようとしている現象を、数学的あるいは物理学的に解説している。著者らが超高磁場MRIを用いて日本をリードする研究を続けていく中で必要と感じたMRIに関わる物理学の基本的知識の集大成と思われる。本書は、MRIの研究を志す者にとって、数学が苦手であれば、頼りになる入門書であろう。

(61期 寺江 聡)



「ともに生きるためのエイズ」 玉城 英彦(会員2)著 彩流社 ¥2,100

HIV感染者やその関係者に向けて、またHIV感染の予防や治療、感染者の支援などに携わろうと考えている人たちに、熱いメッセージを伝える強烈なインパクトを秘めた本である。著者の北大医学研究科国際保健学の玉城英彦教授は、HIV対策について、現実を直視し行動や認識を少しずつでも変化させることの重要性を繰り返し強調している。玉城氏自身が国立水俣病総合研究センターやWHO本部で経験したという、水俣病やエイズに関する偏見や政治的駆け引きのエピソードからは、予防や早期発見だけでなく偏見を解消することの重要性が伺える。本書の特徴の

一つは、内容の幅広さにある。HIV感染症に関する歴史や最新の研究など学術的な話題から、HIV感染者の具体的な社会生活や苦悩まで丁寧に紹介している。中でも特筆すべきは、3人の手記である。2人のHIV感染者と1人のゲイによるこの手記の部分だけでも、一読することを強くお勧めする。この手記をはじめとして本書では、HIV感染やゲイに限らず、難病やジェンダーなど、社会には様々な偏見が潜んでいることを実感させられる。私の前の職場で、現在も非常勤で従事している東京医科大学病院の総合診療科ではHIV感染者は珍しくない。多い時には毎月のように新規感染者が診断される。そうした環境で診療してきて、HIV感染者にはある程度“慣れて”いたつもりだった私も、この本を通して、自分の視野の狭さと偏見をあらためて認識できた。

(会員2 大滝純司)

### 平成24年度 同窓会名簿記載事項 確認のお願い

本年度は、12月上旬にH24年度同窓会名簿を発送予定しております。住所登録の変更がございましたら、11月1日(木)までにお願ひ致します(消印有効ではありません)。期日以降にご連絡いただきましたら、今後の印刷・発行予定に支障をきたしますので掲載が間に合わない場合がございます。お忙しいところ恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

### ご逝去者 新聞142号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。

御逝去年月日	氏名	期	御逝去年月日	氏名	期
平成23年			7月17日	高橋 大輔	73
5月16日	遠藤 瑞雄	専5	7月30日	楠 深	専4
9月8日	村上 潔	専3	8月4日	菅野 英夫	27
10月11日	前澤 貢	35	8月10日	三宅 敬	専5
12月21日	濱口 潤子	30	8月25日	宮崎 保	32
平成24年			8月26日	藤岡 隆男	22
1月6日	小森 克俊	53	8月26日	波多野 典一	68
1月21日	斎藤 隆	33	8月27日	藤野 常志	専旧6
2月	石井 純	65	8月31日	服部 三郎	25
2月3日	佐藤 通夫	39	9月2日	板倉 仁三	27
3月8日	竹内 惟義	29	9月2日	佐竹 幸雄	37
4月	沖館 純吉	29	9月11日	宮本 正樹	68
4月1日	白 渕 勇	15	9月15日	下川 安長	31
5月23日	加藤 泰一	31	9月15日	澁井 淳吾	専新7
6月8日	舟山 昇	専旧6	9月17日	山本 勝衛	39
6月10日	竹田 保	28	9月18日	小座間 定	30
6月18日	滋賀 秀正	14	10月1日	太田 郁朗	専5
6月19日	高橋 香織	22	御逝去日不明	石原 幸夫	31
6月20日	酒井 公夫	29		斎藤 昭三	31
7月8日	岩田 善輔	22		官尾 哲男	専5
7月14日	吉村 啓一	39			

#### ■新聞142号お詫びと訂正

- ・1面 4段22行目 (誤) 福井謙一 (正) 堀江謙一 会員の方より上記の通り訂正依頼がありました。なお、医学部医学科HPの「平成23年度医学部学位伝達式告辞」では修正済みとのことですので、併せてお知らせいたします。
- ・9面 告知板教授就任挨拶 (誤) 東京医科大学八王子医療センター (正) 東京医科大学外科学第二講座 お詫びして訂正いたします。

### 一面の写真説明

「北大植物園 ハルニレの林」 高橋 敦(42期)

#### 編集後記

4月より紙面作りに参加させていただいております83期の吉田と申します。まだ医師としての経験のみならず、社会経験も浅いため、編集委員のお話をいただいたときには戸惑いもありましたが、歴史ある同窓会新聞の編集に携われることを大変光栄に存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

7月に初めて参加しました編集委員会では、同窓会と会員の皆様との双方向の交流、また会員同士の交流を深めるために、今後も同窓会新聞を充実させていきたいと思います。私個人としましても、私と同世代の会員の方々に同窓会をより身近に感じていただき、会員の先輩方との交流を深めていただけるよう、微力ながらも橋渡しを

2012年5月末に撮った北大植物園、ハルニレの林。60年安保が重なる教養過程時代、休講になると友人と出かけては終着点に届かない議論が行われた。貴重な2年間の記憶を表す一枚と受け取られるかどうか。

できれば、と思っております。

新たな試みとして、同窓会新聞を、よりアクセスしやすく、より活用しやすくするために、第142号からは同窓会ホームページより同窓会新聞PDF版をご覧いただけるようになりました。今後もニーズに合わせて、柔軟に工夫・改善していきたいと思っておりますので、皆様のご意見・ご要望もお寄せください。

今年は9月になりましたが、厳しい残暑が続きましたが、この号が皆様のお手元に届く頃には、心地よい秋風が吹いていることと存じます。会員の皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

(83期 吉田 美穂)

同窓会新聞は142号からHP上でもご覧いただけるようになりました。

アドレスは次の通りです。

<http://www.med.hokudai.ac.jp/~alum-w/news/index.htm>

ご意見等ございましたら、事務局までご連絡くださいますよう、お願いいたします。